



TITLE:

精神科學の新分類論吟味

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 精神科學の新分類論吟味. 經濟論叢 1932, 34(1): 19-49

ISSUE DATE:

1932-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130134>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第

卷四十三第

行發日一月一年七和昭

新年特別號

非募債主義の考察……………法學博士 神戸 正雄

精神科學の新分類論吟味……………文學博士 米田庄太郎

景氣に於ける勢力の作用……………文學博士 高田 保馬

穀物專賣論……………經濟學士 八木芳之助

會計學の本質と其の問題……………經濟學士 蟬川 虎三

長期景氣波動の研究……………經濟學士 柴田 敬

魚食論……………法學博士 財部 靜治

經營經濟學に於ける認識目的の規範者……………經濟學士 大塚 一朗

貨幣價值安定けるより見クレヂットに就いて……………經濟學士 松岡 孝兒

徳川時代諸藩の國產會所に就いて……………經濟學士 堀江 保藏

商人排除の傾向に就て……………經濟學士 谷口 吉彦

經濟學の認識主觀とし實踐哲學者……………經濟學博士 石川 興二

土佐藩に於ける育子令に就て……………經濟學博士 本庄榮治郎

企業の競争……………經濟學博士 小島昌太郎

英米の所得稅……………經濟學博士 沙見 三郎

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁 轉 載）

精神科學の新分類論吟味

米田 庄太郎

一緒 論

二 フライヤーのロゴス科學と現實科學との區別

三 右の區別の淵源に就て

四 ジムメルの生命哲學の根本思想

五 ジムメルの古典藝術とレムブラント藝術との對立と、

フライヤーのロゴス科學と現實科學との對立

六 人間學的社會哲學としてのフライヤーの社會學の意義

一、緒 論

私は哲學としての社會學即ち社會哲學と科學としての社會學とを、嚴密に學問論上區別するに非らずば、新たに社會學なる一の新しき學問を建設せんとする、少なくともコント以來の總ての社會學者の主張或は企だては、全く無意味であると考へて居る。と云ふのは、哲學としての社會學即ち社會哲學は最も古い學問の一にして、古代からの何れの哲學者の思想體系を吟味しても、其の哲學の根本原理を適用して築き上げられたる何等かの形態の社會哲學は、一般に夫れの中に見出されるので、社會哲學は決して新しき學問ではないからである。されば社會學は一の新しき學問であると云ふ以上は、夫れは當然科學としての社會學を意味す可きである。併しコントの

sociologie ール及びスペンサーの sociology フォン・シュタイン及びフォン・モールの所謂 die deutsche Gesellschaftswissenschaft oder Gesellschaftslehre は云ふまでもなく、千八百九十年代より大に發達し來れる歐米の社會學、殊に世界大戰争後最も隆盛を致して居ると云はれる今日の歐米の社會學に於て、果して嚴密なる意味にて科學としての社會學と稱し得られるものは、一つでも存立して居るであらうか。

今日の我國の社會學者中には、獨逸の今日の社會學は觀念論的であるから、科學としての社會學ではないが、併し佛蘭西や英米の今日の社會學は實證主義的であるから、科學としての社會學であると考へる人々がある様であるが、かゝる考へ方は學問論上から見れば、淺薄な考へ方であると思はれる。實證主義は觀念論と同様に哲學上の一主義或は一方針であつて、學問論上科學から嚴密に區別さる可きものである。されば實證主義的社會學なるものも、觀念論的社會學と同じく一種の社會哲學であるので、決して科學としての社會學ではないのである。

尙ほ我國の社會學者中には、社會的事實を尊重し、社會的事實の蒐集及び整頓に力を注ぐことを、直ちに實證主義的社會學と解し、之れに反して觀念論的社會學と云へば社會的事實を尊重せず、只純理論の建設にのみ力を注ぐものの如く解して居る様な人々があるが、併しかゝる人々は恐らくは今日の獨逸の所謂觀念論的社會學なるものを、全く知らないものであらうと思はれる。例へば昨年公にされたフライヤーの「現實科學としての社會學」は、恐らくは今日の獨逸の所謂觀念

論的社會學の最とも有力なる一方針を、最とも圓熟させた代表的な一大著作と思はれるが、同書に於て彼は如何に社會的事實、社會的現實態を尊重し、重要視して居るかは、一見して明白である。否な彼は、後に述べる如く、社會的事實或は現實なる社會的生活を離れず、之れに即して研究するのが、現實科學としての社會學の本質にして、又只現實科學としてののみ、眞の社會學は成立し得るのであると云ふまで、事實を尊重し、重要視して居るのである。要するに少なくとも今日に於ては所謂觀念論的社會學も、所謂實證主義的社會學と同様に、事實を尊重して居るので、兩者は事實を尊重するや否やによりて區別される可きものでなく、同等に尊重する事實を、如何なる哲學的見地或は立場から解釋して居るかによりて、區別される可きものである。そうして兩者の哲學的立場は實質的に大に異なつて居るとしても、均しく事實を事實として取扱ふのでなく、豫め一定の哲學的立場或は見地から之を解釋して取扱ふのである以上、兩者共に嚴密に科學としての社會學ではなく、哲學としての社會學、即ち社會哲學であるのである。

却說今日までの歐米の社會學に於ては云ふまでもなく、今日の歐米の社會學に於ても、嚴密な科學としての社會學がまだ建設されて居ないのは、是れつまり今日の最とも發達せる歐米の科學論、殊に獨逸哲學者の科學論に於ても、社會學が嚴密な科學として依て以て建設し得られるに適當な科學の概念及び科學の分類が、また確立されて居ないが爲めであると思はれる。かくて今日社會學を嚴密に一の科學として建設せんとする社會學者が、先づ力を注ぐ可き最とも根本的な問

題は、上述の如き科學の概念及び科學の分類を確立し、社會學を始め一切の社會科學が、嚴密な科學として依て以て建設し得られるに適當な一の新しき科學部類を構成することであると思はれる。そうして是れが即ち私が多年頭を悩まして居る問題にして、又既に時々本雜誌に於て私が論述した問題である。

私は是れまでも時々本雜誌に於て論述せる如く、今日最とも發達して居ると思はれる獨逸哲學者の科學論に於ても、私が社會學を始め一切の社會科學を、嚴密な科學として依て以て建設するに適當すると認める科學の概念及び科學の新しき部類は、まだ確立されて居ないと思ふのであるが、併しかゝる科學の概念及び新しき科學部類を確立する爲めに必要な基本的諸概念は、今日の獨逸哲學者の科學論の中に、最とも多く見出されると考へ、かくて其等の哲學者の科學論を最とも注意深く研究して居るのである。そうして其等の哲學者の最近の著書中で、私が最とも重要な意義を認めたいと思ふのは、さきに挙げしフライヤーの新著「現實科學としての社會學」(Hans Freyer, *Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft*, 1930) に於て、彼は同書に於て精神科學の一新分類としてロゴス科學と現實科學(Logoswissenschaften und Wirklichkeitswissenschaften)との區別を、始めて詳しく論述して居るのである。

私はフライヤーの精神科學の一般的概念其物が、既に私の云ふ嚴密な科學の概念ではなく、哲學的學科の一概念であると考へるのであるから、云ふまでなく彼のロゴス科學と現實科學との區別

を、嚴密な科學としての精神科學或は文化科學の分類であるとは認めない。併し此の事は私が既に本雜誌に於て發表せる若干の論文に於て論述せる處によりて明かであると思ふから、此處で繰り返して論述することを避ける。もつとも私はフライヤーの右の區別は、彼が目的とするのとは異なる意味にて、科學としての精神科學或は文化科學の方法論上に於ても、一定の重要な意義を有するものと考へるのであるが、此の意義に就ては、高野博士還曆紀念叢書中に公にせる拙稿に於て、少しく論述して居から、本論文に於ては其の問題に觸れずに置く。そうして私が本論文に於て主として力を注ぎたいと思ふのは、彼のロゴス科學と現實科學との區別の哲學的淵源を探求して、此の區別は本來如何に哲學的なものであるかを究明し、又其の哲學的淵源に即して、彼が現實科學としての社會學と稱するものを、生命哲學的或は人間學的社會哲學として評價することである。先づ簡単にフライヤーのロゴス科學と現實科學との區別を述べて置く。

二、フライヤーのロゴス科學と現實科學との區別

フライヤーは科學論の根本方針としては、ヴァインデルバント及びリツケルトの方針を排斥して、デイルタイの方針を遵奉し、「科學は根本的には形式論理學的標準に従ふて區別されるのではなく、科學に内住する認識意志に従ふて區別されるもの、つまり最後の對象分類に従ふて區別されるもの、是れ科學が充當的に把握され得る識認態度は、對象の構造及び夫れと人間との生活關係に従

ふて定まるからである」と考へ、かくて彼は精神科學の分類に於て、彼が現象學の出發點と稱するものから出發して居る。彼の論ずる處によれば、精神科學が取扱ふ現實態即ち精神的現實態或は精神的世界は、二つの次元或は方面、即ち精神的内容と心理的作用、或は意味連結と體驗連結、或は精神と生命、或は客觀的精神と主觀的精神、或はロゴスとプシヘ等と稱せられるものを、夫れ自身の中に結合するものにして、そうして其等二つの次元の區別は只辯證法的にのみ、即ち兩者の各々に於て全體の統一が含有されて居て、しかも兩者の間に明亮なる反對或は對立が存立するとしてのみ正當に考へ得られるのである。かくて精神科學は根本的には、辯證法的に相互に結び附いて居る二つの次元或は方面の區別に従ふて、二つの部類に大別される。

今精神的現實態或は精神的世界の組み立ての本質的契機として現存する、精神的内容或は意味連結と稱せられるもの、即ち意味ある形式或は對象の意味内實は、體驗過程に於て絶へず實現されて居るもの、何れかの生命の創造的力から産出されたるもの、かくて何れかの社會的現實態に屬し、何れかの時間的に限定されたる歴史的妥當期間を有するものであるが、しかも其等の意味内實、意味ある諸形式の現存は、夫れの現實的實在及び生成を究明せんとするのではなく、夫れの當體的意義を究明せんとする一の特有の科學的認識仕方を確立する。そうして精神的世界の此の方面に於て、夫れの對象を見出す諸科學は、意味ある諸形式の内實が完全に了解された時には夫れの認識目標に到達したのである。此等の科學は更に其等の諸形式の歴史的起源や、社會的生

活に於ける宿營や、一定の人間との關係に於ける夫れの特徴的表現價值等に關する諸問題をも、呈出することが出来る或は呈出せねばならぬが、しかも此等の問題は此等の科學の論理にありては、諸形式其物の對象的意義や、組織に關する問題に全く附屬して居るものである。此等の科學に中心的であり、此等の科學の論理的構造を規定する立言は、一の歴史的主體の歴史的存在、運命、或は作用仕方等に關する立言ではなく、當體的意味連結に關する立言である。例へば語の諸形式及び意味諸複合からの、又旋律諸形態及び文章の諸構成物からの組み立てとして一の言語を理解し、諸洞見、諸前定、諸方法、諸要請及び諸推理からの組織體として哲學を了解し、かくて文化の一切の意味範域を通して、客觀的精神の世界を意味ある形式として、形式となれる意味として把捉するのは、是れ即ち精神科學の此の第一部類の論理的に中心的な、構造給附的な任務である。要するに精神的現實態は、此等の科學に於ては全く對象的意味連結の世界として、即ちロゴスとしてとり入れられて居る。かくて吾人は此等の科學をロゴス科學と稱することが出来る。

右に述べしが如き意味にて、ロゴス科學と稱せられる精神科學の根本の一部類に對立する、他の根本の一部類として、精神的現實態の他の次元或は方面を對象とする精神諸科學が、當然構成されねばならないが、吾人は之を現實科學と總稱することが出来る。是れ此等の精神科學は何れも、認識者が夫れ自身自覺存在的に屬する處の意味ある生成に對して、充當的認識態度をとると云ふことを、其の本質となすものであるからである。かくて現實科學は一切のロゴス科學に對して

鋭く對立するものにして、そうして夫れによりて又、現實科學の認識態度及び論理的構造が最も明亮に發揮されるのである。ロゴス科學にありては、吾人は客觀的精神的的確なる諸構成物に認識的に對立して居る。此處では吾人自身が決斷す可き何物もない、是れ此處では總てのものは既に決斷されて居る形態であるからである。此處では吾人自身が完結する何物もない、是れ此處では總てのものは既に形式に固められ、完結されて居るからである。然るに現實科學にありては、吾人の認識意志は、吾人自身が其の中に生動し、又吾人自身を通して生成する其の生成の狀況に向けられて居る。社會的現實態に就て考ふれば、云ふまでもなく吾人が成員として屬しない多數の社會的個別構成物がある。そうしてそうである以上、吾人は其等の構成物を純客觀的なものとして、外から眺めるのである。併し其等の總ての部分構成物を、現在社會秩序の全體に集めて考へると、吾人は多種多様な仕方にて吾人を取り入れて居ると同時に、吾人以外の何物からも全く成立して居ない全體的現實態に到着する。例へば吾人は云ふまでもなく、過古の社會的構成物に屬しない。併し其等の社會的構成物は現在社會秩序の現實なる前定、夫れの歴史的基礎、夫れの歴史的由來を構成して居る。そうして其等の社會的構成物を通して流れる歴史的流れは、現在の現實態中に流れ込み、又之を通して更に流れ行く、即ち吾人を通して更に將來の中に流れ行く。されば現實科學としての社會學は、社會的現實態は現在及び將來の中を、かくて吾人の存在及び意志の中を流れ行くと云ふことを、決して捨離し得ない。若し之を捨離するならば、現實科學とし

ての社會學の對象は夫れの自然的軸を外づれ、夫れの核心を失なふて仕舞ふであらう。

フライヤーは精神科學の根本的二部類として新たに確立せんとする、ロゴス科學と現實科學との區別を大體上右に述べし如くに論述して居るが、更に彼が科學全體から見て、之を根本的に自然科學とロゴス科學と現實科學との三大部類に別ち、其の三大部類の根本的差異を論述して居ることは、彼の科學論全體の上から見て、廣く又深く彼のロゴス科學と現實科學との區別を了解する爲めに、甚だ有益であると思ふから、此處に其の概要を述べて置く。

今哲學的に考へられた一の最高見地から考察すると、一切の實在は人間が自覺存在的に屬する現實態となり、實在の一切の科學は此處に云ふ意味での現實科學となるのである。例へば自然が生きた創造的發展として考へられ、そうして人間は夫れの終極目的としてか、又は敵對者としてか、又は夫れの頂點或は大團圓としてか、何れにせよとにかく自然の意味ある一員として夫れの中にとり込まれるとすると、又精神が運命的な生成の流れにして、人類を救済にか又は破滅にか、完成にか又は沈滯或は痲痺にか運ぶものとして考へられるとすると、自然科學も亦精神科學も、最後の意味に於ては共に現實科學となる、即ち人間の意識に於ける、人間が自覺存在的に屬する生成の自己認識となるのである。

ゲーテの自然論やシェリングの自然哲學に於ては、又新プラト派のロゴス論やヘーゲルの精神哲學に於ては、自然及び精神は自覺存在的現實態として考へられて居る。そうしてデイルタイの歴史的世界の概念に於ては、精神的現實態の形而上學が少なくも夫れを運載する基本となつて居る。但しデイルタイの實證主義は彼をして近世ロゴス科學の認識論者とならしめたので

ある。右に述べしが如くにして各客觀的觀念論は、現實的なもの、範疇を包括的な大範疇となさんと努め、此の範疇が狙ふて居る認識に、結局「此處に意味ある生成は自覺に上り、夫れ自身の法則性を洞見する」と云ふ意義を、賦與せんとするのである。

されど夫れ夫れ特殊な認識態度を具備するものとして、自然科學と精神科學とが判然區別されるに至つたのは、是れつまり對象的世界の構造に於て豫示されて居る、一の當體的に必然的な發展である。そうして吾人は此等の科學の三部類の志操及び體系形式を、夫れ夫れ公式化せんとするに當つては、云ふまでもなく常に近代的歐羅巴科學の形態によりて制約されて居るのであるが、しかも此の精神史的に制約されて居る諸形態の中に、確かに認識世界の一の永久的な必然的調節法則を把捉することが出来るのである。

却說意味ある、的確な徹底的に形成されて居る諸構成物に客觀化すると云ふことは、精神の本質である。そうして認識がかゝる構成物に向ふ時には、特有の志操及び價值を具備する一の特異な認識態度が生起する。此處に甚だ明亮な又強い兩極性が、認識の中軸となつて居る。即ち一方に於ては夫れ自身に於て完結し、夫れ自身を基礎とする明確なる形式が存立し、他方に於ては認識主觀、全觀照、全了解が存立する。かくて此處では認識は内部的模寫となる、云はゞ形式及び夫れの内實、夫れの明確性及び妥當性の内部的受容となる。そうして此の認識態度の圖式が、一定の志操として決定され、かくて此の態度の中に作用する精神的諸力、此の態度が使用する諸方法、主觀が此の態度から收める收穫等が内容的に規定されるや否や、一定の世界觀的諸前定に基き、

精神的世界に對する人間の判然決定されたる動作を表現する、精神科學的思惟の一の歴史的形態が成立する。併し此の認識態度の基本構造は永久的なもの、つまり精神的世界其物の構成法則から生まれるものである。かくてロゴス科學は認識の體系に於ける考へ離され難き一節である。

同様に自然科學も亦、認識體系に於ける考へ離され難き一節である。地球は言語や、藝術や、つまり一般にロゴスの如き、意味ある完結せる形式、或は明確なる諸形式の世界ではなく、舞臺、抵抗、生活空間である。夫れは終極妥當的形態でなく、人間的形態化の材料である。そうして地球に對するかゝる全然異なれる生活關係からして、必然的に全く異なれる一の認識態度が生長する。明確なる形式の範疇及び形式となれる意味の範疇が、對象が開かれる鍵である場合には、認識は當體或は物件の觀照、了解、純粹直觀であるが、地球に對しては人間は本質的には純粹直觀の狀態にあるのでない。人間は地球の上に生活し、之を耕作し、即ち之を人間的形態化に引き入れんとするのである。そうして此の第一次的な意志事實、最廣義に解される技術意志は自然科學の認識態度からは考へ離され得ないものである。此の認識態度は科學の動機と異質的な實利動機の混入を意味するのでなく、認識對象其物、及び夫れと人間との生活關係に基因するものである。但し人間が自然全體を直觀する時は、彼の自然思惟は意味ある形態の範疇に上るか、又は自覺存在的現實態に下るか、何れかに歸着するが、兩者の何れにありても人間は既に自然を哲學して居るので、自然科學の立場を去つて居るのである。そうして自然科學的認識の仕事は不可犯的法則

を有し、自然科學は夫れの志操又夫れの思惟形式に於て、科學の體系内に一の獨自の領域を作つて居るのである。

今以上述べし如くに、ロゴス科學と自然科學との二部類が明らかに區別され、夫れ夫れの特有の論理的構造が展開されるとすると、此處に現實科學に關して起る問題は、只左の如きものであり得る。即ち如何なる對象は、自然としても亦ロゴスとしても認められず、かくて自然科學的認識態度に於ても、亦ロゴス科學的認識態度に於ても充當的に把握され得ないか。如何なる對象は本質的に現實態にして、又現實態としてよりは考へ得られないものであるか。要するに人間自身が自覺存在的に屬する處の意味ある生成が、科學的に認識さる可き何れの場合にありても、現實科學の論理的典型が當然適用さる可きである。そうして吾人の心理的生活の現實態、歴史的運動の現實態、及び社會的生成の現實態が、即ちかくる對象であるので、かくて心理學、歴史科學及び社會學は現實科學であるのである。科學史的に考察すると、心理學も歴史學も亦社會學も、何れも先づ自然科學的認識態度に従ふて、一種の自然科學として建設せんとする傾向に支配されて居た。そうして最近には、社會學をロゴス科學として建設せんとする企だてが、殊に獨逸の社會學者によりて起されて居る。併し其等の三科學は決して自然科學としても、亦ロゴス科學としても正當に建設し得られるものでなく、只現實科學としてのみ正當に建設し得られるのである。そうして心理學は心理的現實態の科學的自己認識、歴史科學は歴史的現實態の科學的自己認識、社會

學は社會的現實態の科學的自己認識である可きである。

三、右の區別の淵源に就て

却說フライヤーが新たに立てんとする精神科學の分類、即ちロゴス科學と現實科學との區別の
大要は、大體上前節に於て述べしが如きものである。そうして今かゝる精神科學の新分類を始め
て明瞭に公式化して此を論述したのはフライヤーであるが、併し夫れは根本的には彼の創見では
なく、何れかの先輩の説を發展させて完成したものであることは、輓近の獨逸哲學の發達を學んで
居るものには、明白なる事實である。然らば彼は何れの哲學者の説から出發し、又之れに何れの
哲學者の説を加味して、以て彼の唱ふるが如き精神科學の新分類を立てるに至つたのであるか。
アンドレアス・ヴァルターの如きは、フライヤーはデイルタイの弟子にして、主としてデイルタ
イの精神科學認識論から出發し、之を批判的に發展させつゝ彼の所説に到達せるものゝ如く考へ
て居る様に思はれる。(Andreas Walther, Das Problem einer deutschen Soziologie. Kölner Viertel-
jahrshefte für Soziologie, 9. Jahrg. Heft. 4, 1931) 又して稍々詳しく分析して見ても、フライヤ
ーは科學論の根本方針としては、先づ方法を根本的に重要視するリッケルトの説を排斥して、對
象の本質及び構造を根本的に重要視する點に於て、デイルタイの説に従ふて居ることは明白であ
る。併し云ふまでもなく彼はデイルタイの説を其儘に祖述して居るのではなく、デイルタイと彼れ

との間には大なる距離がある。そうして其の距離はつまりリットによりて作られたものと思はれる。

今リットはデイルタイの説から出發して居るが、先づシュプランガーの影響を受け、夫よりフッサールの現象學によりて之を修正し改造し、更にコーンの説に従ふてヘーゲルの辨證法思想をとり入れ (Cohn, Theorie der Dialektik, 2923) 又ジムメルの影響を受けて、彼の學説を發展させたと思はれるのである。Theodor Litt, Geschichte und Leben, I. A. 1917. 3. A. 1930. Individuum und Gemeinschaft. I. A. 1919. 3. A. 1926. Erkenntnis und Leben, 1923. Philosophie der Gegenwart und ihr Einfluss auf das Bildungsideal. I. A. 1924. 2. A. 1927. Wissenschaft, Bildung, Weltanschauung, 1928) そうしてフライヤーは大にリットの影響を受けて居ることは明かであつて、彼のロゴス科學と現實科學との區別の如きも、彼自身の言明する處によれば、リットの説を更に發展させたものゝ様である。(Freier, Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft, S. 21.) されば彼のロゴス科學と現實科學との區別の直接の淵源は、彼自身の指示して居る處によれば、リットの「個人と共同團體」の第二版第六章「生命運動と意味接合」(大に修正増補された第三版では、第四章中に含み有されて居るもの) に在ると認めねばならぬ。云ふまでもなく私は彼自身の言明を決して疑ふのではない。彼がロゴス科學と現實科學との區別を立てんとする直接の動機は、多分リットの著作中の論述から與へられたものであらう。併し私は彼が「社會學」に於て論述して居るがまゝのロゴス科學

と現實科學との區別は、實質的にはジムメルの生命哲學の根本思想を、精神科學の根本的分類に適用したものに外ならないと思ふ。そうして此の事は社會學の專攻者として私が、特に興味を感じるものである。と云ふのは只形式社會學のみを以て社會學の本質或は全體と見るジムメルの舊社會學概念は、今日は獨逸の社會學にありても大に勢力を失なふて來たが、併し彼の生命哲學は常に今日の獨逸哲學に大なる影響を及ぼして居るのみならず、今日の獨逸社會學、嚴密に云へば獨逸社會哲學にも新たに影響を及ぼして來たことが、右の事實によりて明らかに示されて居ると思はれるからである。要するに今や獨逸の哲學界にありては、生命哲學的或は人間學の方針は大に勢力を振ふて來て居るが、此際社會學を直ちに社會哲學と見る傾向大なる獨逸の社會學界にありては、ヤハリ同方針が大に勢力を振ふに至り、是れより生命哲學的或は人間學的社會哲學が、隆盛を致すであらうと推察される。そうしてジムメルは彼の生命哲學によりて、再び獨逸社會學の上に、大なる影響を及ぼすに至るのではあるまいか。

私は上述の見地から見て、本論文に於てはフライヤーのロゴス科學と現實科學との區別は、彼自身がリットの説を發展させたものと言明して居るに拘らず、實質的にはジムメルの生命哲學の根本的一原理を、精神科學の分類に適用したものに外ならないと認む可き理由を論述し、隨ふて又フライヤーが社會學は只現實科學の一としてのみ、始めて眞の科學となり得るものであると主張するのは、つまり社會哲學は只生命哲學的或は人間學的社會哲學としてのみ、始めて眞の社會

哲學となり得るものなるを意味するに外ならないことを、明らかにしたいと思ふ。

尙ほ隨手に注意して置きたいことは、フライヤーとジムメルとの關係に就てである。上に述べし如く、フライヤー自からは、彼の「社會學」に於ける彼の科學論的考察の出發思想は、リットの思想と完全に合致して居ると言明し、同書に於ける彼の學説はリットの學説を修正し發展させたものであるが如き印象を、讀者に與へて居るが、然るにエステルライヒ修正増補の「ユーバーヰエヒ哲學史」第四卷「第十九世紀及び現代の獨逸哲學」(Ueber Wegs Grundriss der Geschichte der Philosophie, Viertel Teil. Die deutsche Philosophie des neunzehnten Jahrhunderts und der Gegenwart. 12. A. 1923.)に於けるジムメルの哲學の項を見ると、其の終りに彼の哲學に共鳴する四人の思想家の名と著書とが列擧されて居るが、(同書 S. 471) 其の中に Hans Freyer の名と彼の千九百十八年の著 *Grundlage einer Ethik des bewussten Lebens* とが見出される。そうして、同著書に就ては、「一切の體系論に敵對し、生命哲學に聯盟して居る」と云ふ文句が附加されて居る。私はまだ同著書を手に入れて居ないから、夫れは「社會學」の著者、現ライプチヒ大學社會學教授の Hans Freyer の著作であるとは斷言し得ないが、恐くは同人の著作であらうと推察する。して見ると、彼は早くからジムメルの影響を大に受け居たものと思はれるのである。但し「社會學」に於ては、フライヤーは大に體系を重要視して居るので、かくて「一切の體系論に敵對」と云ふが如きジムメルの傾向に反對して居るが、其の點に於ては彼は後に他の哲學者の影響によ

りて、改説したものと思はれる。

四、ジムメルの生命哲學の根本思想

私は前節に於て述べし如く、フライヤーのロゴス科學と現實科學との區別は、彼自身の言明に拘らず、實質的にはジムメルの生命哲學の根本的思想を適用して、新たに精神科學の根本的分類を企だてたものと、見做さる可きであると考へるので、是れより私の此の見解を論證せんとするのであるが、附ては先づジムメルの生命哲學の根本思想を述べて置きたいと思ふ。但し此處ではジムメルの生命哲學の最とも圓熟せる根本思想を、千九百十八年彼が永眠する少し前に公にせる「生命觀」(Lebensanschauung. Vier Metaphysische Kapitel.)によりて、述べることにする。尙ほ私は後に述ぶるが如き主旨にて、私の生命哲學的或は人間學的社會哲學の方針から、フライヤーの社會學を一の生命哲學的社會哲學として評價せんとするのであるから、私の方針の出發點となつて居るジムメルの生命哲學の根本思想を、此處にフライヤーのロゴス科學と現實科學との區別の淵源を究明する爲めに、直接に必要であるより以上に、少し詳しく述べて置く。

却說ジムメルの考へる處によると、生命の統一作用は限界附けられて居ると云ふことと、自から限界を乗り越へて伸びる或は擴がると云ふこととを包括するものにして、そうして此の生命の本質は精神の階段に到達せる生命に於て、最とも明かに洞見される。例へば吾人の認識に就て考へ

るに、吾人は一定の限界内に於ける吾人の知識と、其の限界を越へての吾人の不知識とを包括的に知識し、又其の包括的知識を知識し、此くの如くにして無限に進んで行くことが出来る。是れ即ち精神の階段に於ける生命運動の特有の無限性である。そうして生命は此の自から己れを越へて伸びると云ふ運動に於て、始めて卒直に生きて居るものであり、生命夫れ自身として顯現するのである。要するに自から己を限定しながら、又自から己れを越へて行くと云ふこと、即ち自から己を超越すると云ふことは、生命夫れ自身に内在的であるのである。

今右に述べしが如き生命の一般的概念を、時に結び附けて稍々詳しく究明して見ると、先づ現在とは、嚴密なる論理の意味に於ては、瞬間の絶對的不延長を越へないもの、即ち點が空間でないと同じく、現在は時間ではない。現在は只過去と將來との接合を意味するだけのものにして、そうして只過去と將來とだけが時の大さを有し、かくて一般的に時であるのである。然るに過去は最早ないもの、又將來はまだないものであるから、實在性は只現在にのみ固着して居るのである。されば實在は一般的に時間的なものでない。そうして只實在の内容が現在として具有する其の無時間性が、最早ないもの即ち過去か、又はまだないもの即ち將來か、とにかく一のないものとなつた場合にのみ、時の概念が實在の内容に適用されるのである。時は現實の中にあるのではなく、現實は時でない。そうして吾人は客觀として存在するものに時の概念を適用する場合には、右の論理的パラドクシーの強制を承認せねばならないが、併し主觀的に生きる生命は、かゝる論

理的パラドクシーの強制に従はない。主觀的に生きて居る生命は、論理的に正當であるや否やに頓着なく、時間的延長の中にある一の現實的なものとして、自から感識するのである。

併し更に深く推究すると、生命の當面的現實性は、夫れの過去を器械的事象とは全く異なれる仕方にて保有して居ることが洞察される。殊に生命が精神の階段に達して居る場合には、過去は現在の中に生き込むと云ふこと *das Hineinleben* が、夫れの本質的意義である。かくて生命の現在には、器械的存在の現在の如き點的存在でなく、後の方へ引き延ばされて居る存在である。吾人は各瞬間に於て、瞬間を越へて過去の中に生き込んで居るのである。將來に關しても同様であつて、吾人の現在的意志、感情、思惟は、將來へ直接に生き込むと云ふことが、其の本質的意義である。將來は決して現在から判然限界附けられたる未踏の土地の如くに、吾人の前に横たはつて居るのでなく、吾人は現在に屬すると同時に將來に屬する一の境界地に、常に生きて居るのである。

吾人が過去現在及び將來を概念的に鋭く區別する以上、時は非現實的である。是れ只時間的に延長して居ないもの、即ち無時間的な現在の契機のみが、現實的であるからである。併し生命は夫れの事實性に對しては、右の區別が適用されない特異な存在仕方である。そうして只生命に對してのみ、時は現實的であるのである。時は恐らくは生命其物が云ひ表はされ難く、只體驗されるだけの直接具體性に於て存在する形相の（恐らくは抽象的な）意識形式である。時は生命の内容

を捨離して見たる生命である。是れ只生命のみが、總ての他の現實態の時間無拘束的現在點を、二つの方向に於て超越し、夫れによりて丁度、又全く夫れだけで時の延長即ち時間を實現するからである。現在一般の概念及び事實を固持するならば、生命の右の本質形成はつまり、絶へず現在としての夫れ自身を越へて行くことを意味する。かくて現在の生命が夫れの現在性でないものへ越へて行くこと（しかも此のことが生命の現在性を決定するのである）は、生命の外から生命に附け加はれるものでない。そうして生長及び産出に於て、又精神的過程に於て實現されるがまゝの此の越へて伸びると云ふことが、即ち生命の本質であるのである。要するに己れの實在性を現在瞬間に限制せず、かくて過去及び將來を非實在的なるものに推し込めない存在仕方、或は己れの特有の連續性は、實際には寧ろ此の區別の彼岸に存在し、かくて己れの過去は現實に現在の中に存在し込み、又現在は現實に將來に存在し出すと云ふ存在仕方、かゝる存在仕方を吾々は生命と稱するのである。

今甚だ簡單ながら以上述べしが如き、時との關係に於て規定されたる、ジムメルの生命の一般的概念をよく玩味すれば、フライヤーが「社會學」第一章第八節に於て、社會的現實態の本質を究明するに當つて、特に重要視して論述して居る處の時との關係に於て見たる社會的現實態の基本的特徴なるものは、つまりはジムメルの右の思想を發展させたもの、或は夫れより脱化せるものであることを觀破するに、困難でないと思はれる。

却說ジムメルは先づ時との關係に於て生命の一般的概念を、上に述べしが如くに論述したる後、更に歩を進めて一層深く生命の本質を究明せんとして居るが、其の論ずる處によると、今生命と云ふ存在仕方が、己を越へて擴がる或は伸びると云ふ形式に於て成就されると云ふことは、つまり一の特異な二律背反的關係に基因するのである。吾人は世代の連續を貫通する連續の流れとして生命を表象するが、併し生命を擔ふもの、或は生命の運載者は個體 *Individuen* である。即ち夫れ夫れ相互に他から己を閉鎖し、己れ自身の中に集中し、相互に明かに他と隔絶する諸存在である。生命の流れは此等の個體を通じて、或は此等の個體として流れながら、此等の個體の各に於て淀み、高まり、明確に限定された形式となり、完成せるものとしての一切の内容を具有する周圍の世界并に同類に對して判然區別され、其の境界線の拭ひ去られるのを忍ぶことが出来ない。そうして此處に、生命は無限の連續であつて、又同時に限定されて居る自我であると云ふ、生命の最後の形而上學的一問題が存立する。生命は息みなき流れであると同時に、夫れの運載者及び容器の中に閉ぢ込められ、個體化されて居るもの、かくて他方から見れば絶へず其の限界を越へて伸びるが、しかも常に限界附けられて居る一の形成物であると云ふこと、是れ實に生命の本質構成的構造である。吾人は生命の此の構造に着目して、自から己を超へる生命の伸長或は擴大と云ふ、全く第一次的な一範疇を立てることが出来る。そうして生命の超越性 *Transzendenz* は生命に内在的 *immanent* であると云ひ得るのである。

今生命は自から己を越へて伸びて行くこと、或は生命の超越性は、生命に内在的であると云ふ範疇の最も單純な基本的事實形式は、自覺或は自己意識である。そうして自覺は又同時に、人間的に生きるもの一般としての精神の原現象である。自我は常に自から己れに對立し、覺知するものとしての己れを、己れ自身の覺知の對象とするのみならず、更に又己れを第三者の如くに評價し、そうして己れを己れの上に置くことによりて、絶へず自から己れを越へて行き、しかも己れ自身の中に止まる。是れ此處では主觀と客觀とは同一であるからである。そうして此の主觀客觀同一性は、決して固定せる實體的なものでないから、自我は此の同一性を、自から己れを覺知する精神的生命過程の中に分別するが、決して之を引き裂き切斷しない。併し此の覺知する意識が、覺知されたるものとしての己れの頂點を自から越へて尖つて行くと云ふ過程は、無限に高まつて行くので、私は私が覺知することを覺知するのみならず、更に私は之を覺知することを又覺知する。そうして此處に生命一般の原現象としての、自から己れを越へて伸びて行くと云ふことが、最も昇華され、一切の偶然性から解放されて現はれて居る。當面の最も高い吾人自身を乗り越へて行く意識に於て、吾人は吾人の相對性を越へる絕對者である。更に此の過程の進行は絕對者を相對化するが故に、生命の超越性は絕對的なものと相對的なものと對立が、全く廢棄される眞實なる絕對性として顯現するのである。そうして超越性は生命に内在的であると云ふ原本的事實に包藏されて居る處の、此の對立の上に高まると云ふことによつて、常から生命に於て感じられて居る矛盾は自から靜まつてくる。要するに生命は確定せるものであると同時に變化し得るもの、鑄造されて居るものであると同時に展開するもの、形式化されて居るものであると同時に形式を破壊するもの、拘束されて居ると同時に自由なるものであると云ふが如き、總て此等の一切の反對對立は、つまり生命の最も深奥なる本質は自から己れを越へて行き、己れの限界を越へて即ちまさしく己れ自身を越へて擴まることによりて、己れの限界を設定することであると云ふ、其の形而上學的事實の分解或は屈折に外ならないのである。

併し最後の世界形成的原理としての連續性と形式との間には、或は生命原理と形式原理との間には、上に述べしよりも更により深い一の反對或は矛盾が存立して居る。抑々形式は限界であり、隣接するものから判然浮き出て居るものである。詳しく云へば形式は、内容の永久的に流れ行く系列或は過程が、云はば依て以て折れ曲る一の現實的或は觀念的中心によりて、其の流れ行く過

程の中に溶されて仕舞はない様に結束されて居る一の範圍である。然るに連續性、詳しく云へば實在の絶對的統一性の包括的表現は、眞に嚴密に考へると決して實在範圍のかゝる自己存立に固定することの出来ないものである。随ふて吾人は決して夫れの形式の破壊を云々することが出来ない。是れ此處では破壊し得られる様な形式は、始めから生起し得ない筈であるからである。

今形式は自から變化し得ない、無時間的不變者であるが、併し形式は個性 Individualität である。形式は無數の質料的部分に於て同一的に繰り返して現はれ得るが、併し純粹形式としては二度存在し得るものとは考へ得られない。そうして形式は此の形而上學的唯一度性を賦與されて、夫れによりて形成され、鑄造されたる質料的部分を一の個性的個體的な、夫れ自身に於て言ひ表はし得られ、他の形式によりて形成されたるものから判然區別し得られるものとなし、之を並存及び繼續の連續性から切り離し、之れに特有の意味を與へる。併し此の如き判然限界附けられて居る意味は、毫も停滯することなき全體的實在の流れと、宥合され難きものである。そうして生命は宇宙的又は類的又は單獨的現象として、かゝる連續の流れであるとする、其の事實に於て、啻に形式に對する生命の深い對立が基因するのみならず、更に個性は鑄造されたる形式として、何等の完結的鑄造を許さない生命の流れの連續から脱出せねばならないと思はれる。併し此處で決定的なるは、形式或は個性の特有性、即ち其の固有の特殊性、或は特異性或は單獨性ではなく、生命の一切包括的連續の流れに對立する個性的或は個體的形式の對自的存在、夫れ自身に

於ての存在、獨自的存在である。されど個性は到る處で生きて居り、そうして生命は到る處で個性的個體的である。かくて人々は右の兩原理の不和合性矛盾性を、かの直接な體驗された實在が、知力の平面に投影される場合に、何處でも生ずる其の單なる二律背反の一と考へ易い。併し生命と形式との矛盾にありては、事態は全然かゝる二律背反とは異なつて居る。

此處では生命と形式との二元は、深く生命感情の奥底に埋れ込み、一の生命統一によりて包まれて居るので、只其の二元が云はゞ其の生命の統一の周邊を越へ出でた場合にのみ、二元的分裂として意識され、此の境界地に於て、始めて知力に對する問題として現はれてくるのである。然るに知力はその性格上からして、自から其の二元をやはり二律背反として、其の最後の生命層に投げ返さざるを得ない。處で其の最後の生命層にありては、知力はその性格上只統一によりての二元の征服と稱し得るだけであるが、併し夫れ自身に於ては二元と統一との彼岸に存立する一の第三者、即ちまさしく己れ自身を越へて進むものとしての生命の本質が、支配して居るのである。生命の本質は同一の作用に於て、生命の流れ其物よりもより多くの或物、即ち個性的個體的に形成されて居るものを作り、そうして己れが停滯することによりて、其の流れの中に盡き込まれ、個性的に形成されて居るものを、まさしく突き破り、其の個性的に形成されて居るものをして、夫れの限界を越へ出で、再び己れの流れの中に沈ませて仕舞ふのである。

吾人は決して限界のない生命と、限界附けられて居る形式とに分割されるのではなく、又一部分は連續性の中に、一部分は個性の中に生きて居るのでない。寧ろ生命の基本的本質は、まさしく夫れ自身に於て統一的なる機能である。詳しく云へば夫れ自身の超越と稱せらる可きものにして、連續的生命の流れと、個性的に閉鎖されて居る形式との二元に、分裂されて居るものを直接に一の生命として現實化する、其の夫れ自身に於て統一的なる機能である。されど普通には、右の二

元性の一方面が直ちに生命と稱せられ、他の方面は生命に對する純粹なる反對者と見られて居るとすれば、此處に更に生命の一の絶對的概念を構成することが肝要である。夫れは即ち尙ほ一の反對或は對立によりて浮き出して居る生命を、夫れが爲めに只相對的なものに過ぎないとして包攝する、生命の絶對的概念である。要するに相對の意味に於ての善と惡とを包攝する善の最とも廣大なる概念や、相對の意味に於ての美と醜とを包攝する、美の最とも廣大なる概念が構成されて居る如く、相對の意味に於ての生命と、夫れと相對的な夫れの反對者とを包攝する或物として、或は夫れの經驗的現象として其等の相對的な兩者が展開する或物として、生命の絶對的概念が當然構成さる可きである。

然るに今右に述べしが如き生命の絶對的概念或は理念を、具體的に實現或は充實せんとするに當つて、生命運動の一切の方面を包括して考へると、吾人は生命に對して二つの相補充する定義を下し得る。其の一は生命はより多くの生命であると云ふ定義 (Leben ist Mehr-Leben)、其の二は生命は生命よりもより多くのものであると云ふ定義 (Leben ist Mehr-als-Leben) である。

今生命はより多くの生命であると云ふ場合に、より多くと云ふは、本來其の分量に於て安定せる生命に偶然に或物が附け加はることを意味するのではない。生命は其の各部分、各片に於て、各瞬間に或物を攝取して之を生命に化成する運動である。生命は其の絶對的量は如何にあらうとも、只より多くの生命であることによりてのみ存在し得る。生命は一般に存在する以上、生きたものを産み出すので、そうして其の産み出すことは單に生命の種々なる機能中の一であると云ふのでなく、生命は産み出すが故に生命であるのである。

生命は生命よりもより多くのものであると云ふこと、詳しく云へば生命は夫れ自身であると同時に、夫れ自身よりもより多

くのものであると云ふことは、論理的に考ふれば同一性の原則に背くものであるが、併し直接に體驗されたる生命は、まさしく形成されることゝ、形成されることを越へて進むこととの統一である。心的生命は夫れの内容から見られる以上、夫れは當面には有限で、夫れ自身に於て限定されて居る。夫れは今生命の形式が有する觀念的内容から成立するものである。併し生命の過程は其等の内容を越へて、又夫れ自身を越へて伸び擴がるのである。吾人は一定の内容の内にありて、又夫れの外にある。吾人は一定の内容をとり入れるのであるから其の内容よりもより多くのものである。

右に述べし處によりて示される如く、生命が生命よりもより多くである場合に、生命が己れを超越して入り込む場所は、表象作用によりて、つまり生命によりて産出され、又所有されながら、しかも其の生命によりて産出され運載されて居ると云ふことから獨立して存在する内容、意味、論理的結合物、妥當するもの、存在するもの等の世界である。要するに産出者から直ちに獨立して存在する子を産むことは、生理的階段に於ける生命に内在的である如く、獨立なる意味具有的内容を産出することは精神の階段に於ける生命に内在的である。かくて自己特有の意味を有し、自己特有の法則に従ふ或物、つまり論理的及び價值的諸内容を産出すると云ふことは、精神的生命の本質であると云ひ得られる。

以上述べ來りし處によりて明かなる如く、生命は夫れの本質夫れの過程を、より多くの生命及び生命よりもより多くのものであると云ふことに於て見出すので、生命の原級は其の儘で既に比較級である。云ふまでもなく、生命を諦觀し、直觀する此の仕方の概念的表現は、重大なる論理的困難に遭遇する。そうして吾々が其等の論理的困難を充分に意識しながら、敢て生命を右の如くに公式化せんとするは、是れ此處に吾人は恐らくは論理的困難が、直ちに吾人に沈黙を嚴命しない層に到達して居るからである。但し此の層は即ち吾人が丁度論理學其物の形而上學的根底に觸れてくる其の層である。

却說本節に於て、ジムメルの生命哲學の根本思想に就て、以上述べ來りし處によりて考ふれば

フライヤーのロゴス科學と現實科學との區別は、つまりジムメルが生命の連續性と形式との根本的對立、或は生命原理と形式原理との根本的反對と稱する、彼の生命哲學の根本的思想を精神科學の分類に適用して築き上げられたものであることは、明かに了解されると思ふ。又フライヤーの現實態の概念、殊に「社會學」に於て彼の詳しく論述して居る社會的現實態の概念は、根本的にはジムメルが時との關係に於て論究せる生命の概念を發展させたものであることは、さきにも述べし如く明白であると思ふ。併し私はフライヤーのロゴス科學と現實科學との區別は、つまりジムメルが生命原理と形式原理との根本的反對と稱するものを、精神科學の方法論に適用して到達されたる一結論であることを、更に一層明かに示す爲めに、フライヤーの右の區別が、ジムメル自身が右の根本的反對を適用して、古典藝術とレムブラント藝術との差別を究明せんと企だてたことに、根本的に如何に對應して居るかを尙ほ少しく述べて置きたいと思ふ。

五、ジムメルの古典藝術とレムブラント藝術との對立と、フライヤーのロゴス科學と現實科學との對立

ジムメルが永眠せる二年前千九百十六年に公にせる Rembrandt: ein kunstphilosophischer Versuch は、彼の著作中一般的に最ともよく知られ、又愛讀されて居るものゝ一であるが、彼は本書に於ては、彼の最とも圓熟せる生命哲學の根本的思想、即ち生命の原理と形式の原理との根本

的反對を適用し、古典藝術に對立させてレムブラント藝術の眞義を究明せんと企だてゝ居るのである。そうして彼の論ずる處によると、一切の藝術は生命と形式との兩者を與へるものにして、生命と形式とは、藝術が企だてる現實存在の各解釋及び各評價が、總ての場合に於て先づ何れを重んず可きかを決定しなければならぬ二つの概念である。そうして特に形式を重んじ、形式から或は形式によりて生命を擱まんとするのは古典藝術の特質であるので、古典藝術の問題は形式である。かくて古典藝術が主題とする生命の一定の現象は、古典藝術が線的、色彩的、空間的明亮の規範や、美及び特質描寫の規範に従ふて、之れに與へる一の觀念的自己存在を有するものとなつて居る。古典藝術は其の主題とする生命現象を、夫れを産出する生命過程から引き出し、切り離して眺めて居るので、かくて只其の生命現象の藝術的形態化に内在的な諸法則性のみが、夫れ自身で妥當するものとなつて居る。されば古典藝術は無時間的存在にして、古典藝術に於ては生命が生滅の現象として現はす一切の要素は、排除されて居る。

然るにレムブラントは古典藝術家に反對して、生命から形式を擱まんと企だてたので、かくて彼の藝術の本質及び目的となつて居るものは、確定せる統一體に流れ込んで仕舞ふた共同的實體的な生命内容ではなくして、生命の流動過程其物である。レムブラント藝術は、古典藝術の如き様式化する或は型にはめる藝術に、必要缺く可からざる抽象の仕方を全然排斥して居る。レムブラントにありては表現されたる契機は、夫れに流れ込む衝動の全體を保有して居るので、彼は此

の流れの歴史を語つて居る。彼が直觀の何れかの立場から切り出す全體の各片は、全體の總體を顯現して居る。吾人がレムブラントの作品に於て明かに見るものは、一の普遍的なるもの、云はゞ概念的に把捉し得られる一の形成物ではなくして、個性の自己存在、夫れの言ひ表はされ難き獨自性、夫れの云はゞ夫れ自身の爲めに展開する運命である。さればレムブラントの畫ける人物の肖像にありては、一切の生物の保有する死の要素さへも、一般に繪畫に於て見られるよりも遙かに印象深く、遙かに強く感じられる。死から全然脱却して居る様な純粹生命の概念は、一の抽象物であるから、現實な人間として畫かれて居るレムブラントの人物肖像にありては、死は生命に內在的なものとして現はされて居る。彼の畫く人間は、常に死ぬであらう人間として畫かれて居る。彼の畫く人間は、運命が深く其の存在に滲み込んで居る人間として畫かれて居る。さうしてまさしく夫れが爲めに又、レムブラントの宗教的藝術にありては、一切の教義的内容は排除されて居る。彼が宗教的藝術に於て大に強調して居るのは、主觀的な宗教的生命其物、宗教性其物である。さればレムブラントの藝術は、かの希臘羅馬的精神の產物にして、形態主義の典型的藝術である古典藝術、換言すれば個性的實現の彼岸に表現されて居る意味或は形式によりて、始めて構成物の眞義を洞察させる古典藝術に對立する處の、自由創造主義及び日耳曼民族的個性官能の藝術、即ち生命を何等かの形式との對立に於てはなく、生命夫れ自身の純粹なる意味に於て表現せんとする藝術の恐らくは最とも重要な代表者である。

今私は以上述べし處によりて、只ジムメルが生命原理と形式原理との根本的反對を適用して、「レムブラント」に於て詳しく論述して居る古典藝術とレムブラント藝術との對立の根本思想を、

極簡単に指示しただけであるが、夫れによりてもフライヤーのロゴス科學と現實科學との區別は、ジムメルの古典藝術とレムブラント藝術との對立に對應するものであること、詳しく云へばフライヤーがロゴス科學と稱するものは、根本的にはジムメルが古典藝術の本質と見るものを適用して構成せる精神科學の一部類にして、又フライヤーが現實科學と稱するものは、根本的にはジムメルがレムブラント藝術の本質と見るものを適用して構成せる精神科學の他の一部類であることは、明かに了解されると思ふ。

六、生命哲學的或は人間學的社會哲學としてのフライヤーの社會學の意義

私は以上數節に於て論述せることによりて、フライヤーのロゴス科學と現實科學との區別は根本的には、つまりジムメルの生命哲學の根本思想を、精神科學の分類に適用して構成されたるものであることを明かにしたと思ふが、夫れによりて又フライヤーの精神科學と稱するものは、嚴密なる意味の科學としての精神科學を意味するものでなく、哲學的諸學科其の物、或は夫れの一大部門を意味するものであること、隨ふて又其の一部類としての現實科學なるものも、ヤハリ哲學的諸學科の一部類を意味するものであることは、益々明かに了解されると思ふ。さればフライヤーが今一の現實科學として新たに建設せんとする社會學は、私が本論文の(一中)に述べしが如き科學としての社會學ではないので、かくて嚴密に云はゞ夫れは一の科學としての社會學として評價する可きものでなく、一の社會哲學として評價する可きものである。そうして今一の社會哲學として見れば、フライヤーの社會學は現實なる現代意識に對して、重要な意義を有するものと思

はれる。

私は一方に於ては嚴密なる科學として社會學を建設せんと努力して居ると同時に、他方に於ては社會哲學を新たに建設せんと努力して居るのである、一層詳しく云はゞ、今日までの社會學の發達の歴史的狀況から見れば、嚴密なる科學として社會學を正當に建設する爲めには、之れに對立させて同時に社會哲學を建設することが必要であると考へて、社會哲學の建設にも努力して居るのである。そうして今日までの哲學の發達の狀態、殊に今日發達しつつある新しき形勢から考へて、少なくとも現代の吾人を最も深く満足させ得る社會哲學は、生命哲學的或は人間學的社會哲學である可きであると確信して居る。されば千九百二十七年に Heidegger の Sein und Zeit 第一卷が公にされるや、夫れが私の社會哲學の方針の展開を資くる處大なるを覺り、同書中私の社會哲學の方針から見て特に重要と思はれる部分を、直ちに本雜誌上で紹介して置いたのである。併し私の社會哲學の方針は、根本的にはジムメルの生命哲學から出發して立てられて居るのであるから、私は到底ハイテッガーの説を其の儘に承認することは出来ないのである。然るにフライヤーが一の現實科學として新たに唱へ出した社會學は、私の社會哲學の方針に一致する處少なくない。しかも實質的には私の考へと異なる點も少なくない。それで私は此處に私の生命哲學的或は人間學的社會哲學の方針から見て、フライヤーの社會學をやハリ一の生命哲學的或は人間學的社會哲學と認めて評價し、夫れによりて私の社會哲學の方針の根本思想を示し、以て讀者の示教を仰ぎたいと思ふ。併し本論文は既にあまりに長くなつて居るから、別な論文として之を述べることにする。

(昭和六年十一月二十九日)